

Title	パスカルとサン・シラン(2) : 2. ポール・ロワイヤルとの接触
Author(s)	田辺, 保
Citation	大阪外国語大学学報. 18 p.83-p.95
Issue Date	1968-01-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80299
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

パスカルとサン・シラン (2)

2. ポール・ロワイヤルとの接触

PASCAL ET SAINT-CYRAN (2)

Tamotsu TANABE

Résumé

Après être venu à Paris en 1647, avec sa sœur Jacqueline, pour remédier mieux à sa maladie, Pascal est entré, par l'intermédiaire de M. Guilebert, en contact avec les Messieurs de Port-Royal. Mais, pourtant, il s'est trouvé en désaccord avec l'abbé de Rebours sur l'utilité du raisonnement bien construit pour nous porter à croire. On pourrait en soupçonner plusieurs causes, mais sa nature d'indépendance et la passion un peu trop apostolique de l'abbé auraient entraîné, à coup sûr, cette séparation infortunée. A mon avis, sa foi une fois retrouvée à l'occasion de la "première conversion" mais pas confirmée par le directeur de Port-Royal, à cause de ce schisme qui lui avait laissé au fond du cœur une grave blessure, il a pris sa fuite éphémère dans la société mondaine. Au cours de l'année 1648, il a écrit trois lettres adressées à Madame Périer, sa sœur aînée, en lui faisant part de son dissentiment malheureux avec M. Rebours et en lui exposant ses sentiments sur quelques conceptions théologiques. Je suis sûr que ses opinions sont complètement imprégnées de pensées caractéristiques de Saint-Cyran. Nous essayerons de les analyser, d'en éclaircir les sources authentiques et enfin, de dégager quelques idées principales qui inspirent les *Pensées*: citons, à titre d'exemples, choses corporelles considérées comme images des spirituelles, nécessité de purifier toujours l'intérieur, notre dépendance perpétuelle de la miséricorde de Dieu.

(1)

1647年5月¹⁾ブレーズ・パスカルは、妹に附添われ、父に先立ちルーアンからパリへ出た。姉ジルベルトの伝記にも記録されているように、この当時「24歳頃であった」ブレーズは、常人の想像を絶した重症に苦しめられていた。パリ出京の第一の理由は、病気の悪化に伴い良医につくためであったという。かれの苦痛の烈しさは、そばで見ているだけでも「まさに業苦と言える程」

であった。わたしたちはまずこの時期において、病苦の深化と完徳を目ざそうとする一途な求道の願いとが一致していることに注意しておきたい。ジルベルトも、「弟は、いよいよ神の御旨にかなう道を求めつづけ、キリスト者の完全をねがうその思いは、24歳の頃から一段と燃えあがって、とうとうわたしどもの家族全部にまで広がって行ったのでした……」「……つまり、弟はもはや徳を学ぶこと以外にどんな学問にも心を向けまいと思っており、病苦を通じてこそ、この建徳の道がまっとうされるとさとしておりました……」と述べているとおりである²⁾。「神の御旨にかなう道」と言われ、「徳を学ぶこと以外に学問はない」という教えは、ポール・ロワイヤルの指導者サン・シランが、つねにその弟子たちにくりかえし説いていたところである。たとえば、その手紙の一節にも、

《Pour s'avancer dans la voie de Dieu, il suffit, au lieu de multiplier les connaissances, (de) multiplier les bonnes œuvres…》³⁾

《…à propos de lui donner quelque chose de plus élevé enfin qu'il apprit à mépriser les autres sciences…》⁴⁾

などと書かれているのを見ても、うかがわれる通りである。

パリ到着後は、Saint-Merri 教会に出席していたが、程なくパリのポール・ロワイヤル修道院付属礼拝堂に姿を見せるようになった。サン・ジャック街の礼拝堂に赴くことをすすめたのは、ルーアン近郊の師ギユベールであったとも言われ⁵⁾、1648年初めにははやくも、ある日曜日の晩禱の時に祈るパスカルの姿が見られたと伝えられている。当初はただ、礼拝に出席し、サングラン師の説教に深い感激をおぼえているだけであったが、やがて再びギユベール師の紹介で直接サングランに接近するにいたる。サングランは、特に知的教養も神学的素養ももたぬ人であったが、その高い見識と、力強い熱情、超自然的な感覚で人々をみちびいており、「まれに見るすぐれたたましいの師、サン・シランの精神の直接の継承者」といわれる有徳の指導者であった⁶⁾。パスカルは、師の高い霊性と心にくい入るその説教にひきつけられ、敬意をいだいて近づいたのであるが、サングランは少壮学者として令名高く、当時まだ回心後日も浅かったこの24歳の青年をいくらかおそれる気持から、自ら個人的な導きにあたることを避け、自分の代理人ルブール師に託したのであった。こうして1648年1月以来、ポール・ロワイヤルの助祭アントワヌ・ド・ルブールとブレイズとの接触がはじまるのである。ルブール師は43歳まで世俗のうちに生き、サン・シランにより回心、オーヴェルニュ出身で、パスカル家とも緊密な関係をもっていた人でありながら、はからずもこの人の指導に服することになった結果が、回心後のパスカルの生涯に微妙な屈折をもたらすにいたるのである。サン・シランは、このルブール師についてヴァンセンヌの獄舎に捕囚中、次のように述べている。

《Si M. de Rebours me croyoit, il ne parleroit jamais à des gens qu'il sauroit être déraisonnables…》⁷⁾

ところで、1648年に姉ジルベルトあてに書かれたパスカルの3通の手紙のうち、特に最初のも

の（1月26日付）は、かれが初めてルブール師と対面し、対話を交わした時の報告であり、そこには師に代表されるポール・ロワイヤルの聖職者たちとの間に致命的な感情の齟齬を来すにいたった経過がくわしく説明されている。この手紙によると、ルブール師にある懸念をいだかせ、パスカルにひそかな警戒心をおぼえさせるようになった原因は、次のような内容のことをパスカルが言ったためである。

《…Le raisonnement bien construit portait à croire les choses de la foi, mais il avait soin d'ajouter <quoiqu'il les faille croire sous l'aide du raisonnement…>…》⁸⁾

わたしたちはここで、パスカルが理性の全的な是認をし、理性を有効に用いることにより神証明に達しうることを確信していたと結論するのは早計にすぎよう。また、『パンセ』の中で理性の運用にある限界を設けているのと、この時期の考え方とに段階の相違があると論じるのも浅薄な見かたであろう。もともと、『パンセ』においても「理性の服従とその利用」が基本的なパスカルの立場であり、「理性を否認することほど、理性にかなったことはない」（fr. 367）と述べられている反面、「理性の原理にさからうならば、宗教はおろかなものになる」（fr. 358）という考察も忘れられてはいないのである。そして、宗教の真理を説きつけるための一方法として、理性の力による方法があげられ、「それだけでは議論も弱い」（fr. 378）という留保条件がつけられながら、理性のある程度までの有用性の確信がかわらずに維持されていることを知っておきたいと思う。アウグスチヌスやジャンセニウスにおいても、理性は信仰に至らせる一つの手段として一時的に肯定されており、その考え方を受けついで、はやくも若いパスカルのうちにアポロジストの情熱が見出されることを注意しておきたい。ルブール師への言葉もそういう使徒的な熱心が思わず不用意にもらしたものとみなされ、文中に見られる《suivant les principes du sens commun》の添え書きによっても、後年の『パンセ』の作者が拠って立った「人間より神への道」の一方途の、萌芽ともいうべき姿勢が発見できる。ところで、他方、パスカルにはたえず完全を求めるといふ生来の性質があり、ためにポール・ロワイヤルとの関係にも静的な、まったき随順が初めからあらわれてこず、いつもかれが不満や動揺を抑えきれずにいた。それというのも、かれが対象にしていたのは、隠士たちでもジャンセニズムでもなく、「サングラン師とすら離れていたい気持ちがあったのではないか」と推断するのは⁹⁾、いささか見当違いであろうと思われる。わたしたちは、この手紙の中にも微妙にあらわれている、パスカルのいくらか自己弁明にも近い感情のためらいと、反省の調子に注意しておきたい。《…enfin, après y avoir bien songé je n'y trouve qu'une obscurité où il serait dangereux et difficile de décider, et pour moi j'en suspends entièrement mon jugement, autant à cause de ma faiblesse que mon manque de connaissance…》¹⁰⁾

パスカルは、ポール・ロワイヤルの指導者たちが、新しい入門者に対して謙虚を要求したことに反抗したり、その独特な不羈の性格ゆえに、自分自身の主張を強弁しているのでもない¹¹⁾。むしろ、譲歩的な表現を用いてかれが承認している事実の方にこそ、目を留めなければならないで

あろう。わたしたちはそこに、「最初の回心」以後、かれが受けとめた信仰の真理、ジャンセニスト的な宗教の本質理解の諸特長を見てとることができよう。ブーリエ師との不幸な感情的衝突によって、ポール・ロワイヤルとの最初の接触到、ひそかな・奇妙な疎隔があらわれはじめるのである。第2の手紙（1648年4月1日付）は、ジャックリーヌと共同の署名になっているが、ここにも兄妹の間に何かのいざござがあったらしいことがうかがわれ、第3の手紙（同年11月5日付）も、事情不明であるが「こみ入った事件」について触れている。これ以後1652年1月ジャックリーヌの修道院入りの際のブレーズの激昂、1653年妹の持参金設定にあたり、かれが示した理不尽ともみえる反対ぶりは、かれの内心に渦巻いていたある葛藤を確かに裏書きしていると思われる。それでいて、1654年夏から秋にかけて、決定的回心直前の精神的危機の時期にも、かれはポール・ロワイヤルの指導者たちのだれをも訪問しようとせず、ただ妹ジャックリーヌだけにひそかに内なる苦悶を打ち明けつづけた。こういう一連の経過が起るにいたった原因は、ブーリエ師がブレーズをみちびくにあたって、この知性的にすぐれた青年に対し、いくらか慣習的に、過度の伝道の情熱をもってあたったことにあるのではないかと想像される。ブレーズとしては、十分ブーリエ師の言葉の中にある正しさをさとることができたはずであるが、独力で事柄の内容を判断し、是非を裁定しうる程のこの強い精神にとって、こういう些細な一つの論題のみを根拠として、全面的に人格の立場を否定しきろうとする宣教者の独断にがまんができなかったのであろう。ノエル神父との論争においても、厳正な推理力と明確な分析力をみごとに示しているかれのことであった。ル・パリュール氏あての手紙によってもうかがわれるように、明らかにかれは、判断力の劣った相手に対してひそかな軽侮の念と、いくらか高みに立って相手を見下そうとする誇らしさの感じとを内心に抱いていたのである。

《…mais comme elles témoignent plutôt qu'il n'entend pas ma pensée, que non pas qu'il la contredise...》¹²⁾

サン・シランの教えは、霊的指導者へのまったき随順を要求するものであった。ブレーズは表面的には服従の態度を示しつつも、内心の動揺を抑えきれず、一たんポール・ロワイヤルの関係者たちとの間にひらいた疎隔感は、かれの心の中でより深い敬虔への徹底を阻む、何らか知性の傲慢の一種のように、否定的にはたらいとみなされる。かれが、心の底から《Soumission totale...》を告白するにいたるのは、1654年11月の決定的な夜を待たねばならなかった。1649年以後、ブレーズの霊的生活については、その進展ぶりを伝える資料がまったく欠けているのであるが、おそらく病の悪化とともにいよいよ自己の内部に人間存在の矛盾と危機の意識を痛烈に実感せしめられ、この欠如をおおう信仰の真実をますます具体的に体験していたであろうに、実生活においては、科学研究へのあらたな没頭と、社交生活への耽溺という事態があらわれているのである。クリスチナ女王に計算機をささげた手紙の中に溢れている、ことさらに阿諛と自負にみちた調子に注目しておこう。また、社交生活の開始を、ジルベルトは医師のすすめという理由に帰しているが、そこには、ポール・ロワイヤルとの不幸な衝突からうけた傷あとをカバーするため

というかくれた、内的な動機がなかったとは断言できない。一たんは、知的にせよ回心の機会を与えられながら、その信仰がしかるべき指導者によって「堅められて」行かなかったため、自己内部にいよいよ大きく裂け切れて行く二律背反の苦悩にたえ切れず、ブレースは「社交界」へと逃避して行ったのではないかと考えられる。決定的回心の直前に書かれたとみられている小品『罪人の回心について』の中にも、神によって既に触れられていながら、「この世の世の虚栄を離れられず」、その「楽しみの中にあっても、不安にたえずおそわれていた」時期についての回想が含まれているが¹³⁾、パスカルのいわゆる社交生活がこの内心の苦悶を秘めかくされつつ営まれていたことを見のがしてはならないであろう。

(2)

1643年、サン・シランの死後、かれが与えた霊的な深い知識、聖なる生活の模範などが周囲にあった人々に強い印象を残し、その言葉は真の託宣であるかのような、非常な崇敬を集めていたという。加えて、1643年刊のアルノーの著作《*La Fréquente Communion*》の影響もあったのであろうか、ポール・ロワイヤルは、サン・シランの遺徳をしのぶ人々を多数ひきつけ¹⁴⁾、隠士たちの数も増え、修道院も拡張され、三たび選出されたメール・アンジェリック院長のもと、故人の残した感化のもとにかおり高い霊的生活が営まれつづけていた。この時期にパスカルはポール・ロワイヤルと直接に接触したのであり、1648年、回心直後のパスカルがしたためた前記の3通の手紙はよくこの雰囲気を反映していると思う。いくらか新しい入信者らしい感激と熱中がみられるにしても、あたかも使徒的な熱情をこめて説教口調で、ジルベルトに宗教の諸真理を説きつくそうとしているかれの調子には、たしかにサン・シランの手紙にも溢れていた伝道者の情熱がのり移っていると言えよう。わたしたちは、以下にこの3通の手紙の分析を進めながら、そこに洩れ出しているサン・シラン的なテーマをひろい上げてみたい。

まず、第一の手紙において、姉が一たん決意して踏み入った霊的な道に進歩していることをよるこんでいる個所は、サン・シランが指導にあたった弟子たちに対する態度と同じであるとレルメも指摘している¹⁵⁾。そして、それは人力を超えた「支え」があったからこそであり、人間的な手段を用いずになされたのであって、自分の中にはそういう力は何もないという認識は、当然、ジャンセニスト的な主題の一つである。人間本性の弱さをなげき、「盲人が盲人を手引きする」現実を憂えているのは、サン・シランの手紙のどこかで読んだ調子を伝えているものにちがいない。

《…Ma faiblesse est si grande…》¹⁶⁾

《C'est une chose déplorable…que notre faiblesse.》(S.C.IV)¹⁷⁾

*

*

*

《…j'aurais droit de craindre pour nous deux le malheur qui menace un aveugle conduit par un aveugle.》¹⁸⁾

《Il y a un terrible sentence dans l'écriture laquelle doit épouvanter ceux qui cherchent la vraie voie qui mène à Dieu qu'un aveugle servira de guide à un autre aveugle et que tous deux tomberont dans la fosse, c'est-à-dire <dans l'enfer>. 》¹⁹⁾

ここにはやくもうかがわれる魂のおののきに注意しておきたい。パスカルは、ルブール師に対し、ポール・ロワイヤル関係の著者を読んでいること、《…nous étions de leurs sentiments》と告白している点からみても、サン・シランの精神の浸透したこの派の著作に深い共感を寄せていることを自ら認めているといえよう。さらに、つづく第二の手紙は、前論文において明らかにしておいたように²⁰⁾、サン・シランの《*De la vocation*》と題する手紙を傍において書かれたものであり、まったく、このヴァンセンヌの幽囚者の思想をそのまま反復しているといってもよいものである。もっとも、デュ・アメル氏にあてたこの手紙の内容は、司祭職への召命の本質について扱ったものであり、「内的な召命」の必要を力説し、同時に真の召命が如何に欠けていたかを追及したものであった。パスカルは、その文体が「非常に高揚した」(relevé)ものであると感想をもらしており、かれの受けた感動の余燼をうかがわせている。ただし、姉あての手紙の内容は、このサン・シランの手紙の内容とは直接の関係はなく、「召命」についてとくに解説をほどこしたというようなものではない。

第二の手紙は、後年《*Pensées*》の基本的な思想となっていくつかの考え方の萌芽が示されている点で、大へん重要なものであろう。たとえば、次のような諸点である。

1) 物的なもの、^{イメージ}霊的なものの影であり、被造物が霊的なものにいたる機縁になるという、象徴主義。

2) 自然は神を愛する者には神を明らかに示し、神を知らぬ者には神を隠すという、この世の頹落の結果としての「暗さ」。

3) イエス・キリストのからだの一部として信仰者のつくすべき義務、キリスト者の完全。

これらの諸主題がいずれも、サン・シランの教説のうちに随所にくりかえし主張されているものから取り出されてきたことは、勿論、言うまでもない。わたしたちは以下に、その典拠のほんの数例のみを列挙することにしたい。

1) 《corporel》—《sprituel》という語の区別は、たとえば手紙 XLII, LXXXVII などに見られ、もともとアウグスチヌス的な概念であって、サン・シランにもしきりに愛用されている。

《…plusieurs circonstances particulières, où reluisent quelques marques visibles de son invisible volonté…》(S.C. II).

《…la grâce de Dieu a changé son cœur & commencé à lui donner le premier goût des choses spirituelles.》(S.C. XLIV).

この考え方はパスカルの霊的教説のいわば原型であり、《*Pensées*》494, 519, 530などに見られる象徴論に発展する。「完全な失墜」によって、まったく光を失ったのではなく、いわば「獄

舎」にあるごとく、この地上的なものの中につながれているにすぎないのである。

《…nous devons nous considérer comme des criminels dans une prison toute remplie des images…》²¹⁾

《…nous sommes…dans la captivité des créatures…》(S.C.LXX).

2) 「隠された神」(イザヤ45:15)の観念は、《*Pensées*》fr. 49などにおいて、パスカルに親しい観念であることは周知の通りであるが、サン・シランもその手紙の中で、たびたびそのことを述べている。

《Dieu habite dans des ténèbres.》²²⁾

《…dans un obscurcissement pénible, sous lequel il se cache…》(S.C.VIII).

またまた、fr. 439, 440, 442 などをはじめ、人間の盲目ぶりをえがいた《*Pensées*》の断章は数多いが、これもまた、サン・シランのテーマにほかならない。「…見ることをねがう人たちには、光は十分にあり、それと反対の気持の者にはたっぷりと暗さがある」(309)という考察は、確かに次のような言葉の反響であろう。

《…que ceux qui voyent ne voyent point; et au contraire, que ceux qui ne voyent point, voyent…》(S.C.VI).

《…l'aveuglement, dans lequel vivent les plus clairvoyans, et les sages…》(S.C.IV).

3) イエス・キリストの肢体(676, 684, 688など)として、それにふさわしい者となり、自己を憎み神を愛せよという教え(689, 699)は、《*Pensées*》の第26章「キリスト教の倫理」の中にくりかえして述べられている。ペリエ夫人あて第2の手紙の中に、世に属する被造者は自己の分に甘んじていてもよいが、キリスト者は、自分の *pureté* と *perfection* に限界をおいてはならないと説かれているのは、この具体的な実践倫理の最初の自覚であつたろう。サン・シランもまた、

《…la pureté de son Evangile sur lequel neantmoins tous les Chrestiens seront jugez…》(S.C.VIII).

《…il y faut une si grande pureté de cœur》(S.C.XI).

と語り、手紙 LXIV では *perfection* の要について述べているほか、VI にはパスカルと同じマタイ 5:48 の聖句を引用している。

《…les perfections divines, qui doivent neantmoins estre toutes, selon l'Evangile, le modèle de ceux qui vivent en vray chrestiens…<soyez parfaits, dit Iesus Christ, comme vostre Pere qui est au Ciel, est parfait>…》(S.C.VI).

この手紙の時期に、パスカルがここまでサン・シランと同じ口調で、ほとんど同一の信仰内容を説いているという事実は、直接また間接に、かれがこの先駆となった人の教えにどこまで深く親炙していたかを示すものであろう。とくに、第2の手紙は、失われた神と墮落した本性の実状を赤裸にえぐり出す《*Pensées*》の弁証論の基本的な方向の土台ともなっている、この世の「暗

さ」の実態を鋭く見究めていることによって、パスカルの思想全体との関連においても見逃すことのできない重要な文献であると言えよう。わたしたちは、別の所で、この「暗さ」の意味を丹念にたずね、そのサン・シラン的思想との交点をさぐってみるはずであるが²³⁾、ここでも何より「内なる召命」として、内的人間の完全な変革を求めるその信仰の特異な形態をしっかりと見すえておきたい。霊の影^{イマージュ}をうつすこの世の薄明の中に、真の光と「愛」をねがい求めようとする姿勢こそ、サン・シランからパスカルに通ずる独自のミステックの系譜なのである。

なお、この手紙の中に、もう一個所、サン・シランの名が引用されている所があり、そこでは「霊による新生」の日を、真の「初め」としたかれの用語が引かれているのであるが、この語も「回心」を生涯の明瞭な転機としてとらえていた厳密なかれの考え方をうかがわせるものである。

《…au commencement de sa conversion.》(S.C.I) 《…en ces premiers commencements》(II)

(3)

第3の手紙は、前2通とちがい、ジャックリーヌとの共同執筆の形になっている。ここでもまた、わたしたちはひとしく、サン・シランの《imitation particulière》(*Lhermet*)を感じとることができる。レルメは、さらにそれを《adaptation de génie》であると言い²⁴⁾、特に手紙第2巻の380—461ページを源流^{スワルス}として指摘している。第3の手紙に顕著にうかがえるのは、神とその恩寵のみがすべてを導くという一貫した主張であり、これは後年、たとえば、《*Prière pour demander à Dieu le bon usage des maladies*》などに、より胸を打つ pathétique な調べを伴ってもれ出すあのトーンと同じ種類のものである。たえずこうして神の恩寵を新たに求めつけねばならないとする神中心主義、恩寵の内的な働きを重視するこういう考え方は、当然、まず直接的に、サン・シランの手紙に溢れているあの「内的な^{フレミツスマン・アン・テリヨール}おののき」を反映しているものである。教理的な特長もさることながら、何よりもここにも移し植えられている同じ精神の律動に注意すべきであろう。《…ils sont les maîtres dont les autres sont les disciples.》²⁵⁾という一行には、師サン・シランの霊性の後をつぐ「弟子」であるという自覚が、ひそかに告白されているような気がする。

第3の手紙は、冒頭ジャックリーヌのポール・ロワイヤル修道院入りの決心をめぐってのいざこざについての報告からはじまる。次にパスカルが、神のみが真に教えうるので、人が恵みを伝えうると考えてはならないとジルベルトに説いている所は、いかにも新しい改宗者らしく高飛車で激越な調子がこもる。そして指導者の選択と、指導者への尊敬・服従をすすめている個所にいたる。こういう霊的な指導者の必要はサン・シランも何度も語っていたことであり（たとえば、S.C.I), 弟子たちにまったく随順と崇敬をもくりかえし要求している(S.C.XXI, XXII, XXI-II, XXIV, LXXVIIなど)。また、サン・シラン自身も、こういった指導者としての情熱と自覚

をもっており、自らに指導がゆだねられたポール・ロワイヤルの修道女たちに対しても、むしろ専制ともみえる強い力をふるったことがうかがわれる²⁶⁾。パスカルの場合、深く心の底に受けとめられたという指導者への服従の義務感はやがて、『メモリアル』におけるあの一途な誓いの言となって結実する。

《Soumission totale ... à mon directeur.》

このあと、手紙は一転して、恩寵のたえざる流露 (continuation de l'infusion de la grâce) がなくてはどんな義の実をも生むことができないことを、詳細に切々と論じつくし、手紙全体の中枢部をなす。「恩寵」の問題が、ジャンセニウスからサン・シランに通じる神学思想の中心的な関心の的であり、また、当時各派の論争の焦点になっていたことは言うまでもない。パスカルのこの手紙は、さほどに専門的な内容のものではないが、不断の恩寵の更新と、聖霊による内なる感化を強調している点、たしかにジャンセニスト的な恩寵の有効性 (efficace) をいくらか重視している傾きを感じとることができる。恩寵が具体的・現実的に内に働いてあらわれる結果の大切さを力説している点、「心情の宗教」の価値を発見した実践者サン・シランのミステックな態度を受けつぐものと断言してもよい。手紙中に見出される《...par le mouvement intérieur de Dieu》の言葉は²⁷⁾、サン・シランがたびたび語った《mouvements intérieurs de l'amour》に通じるものであり²⁸⁾、このような恩寵の《un particulier mouvement》(S.C.XI) なしに善業を果すことができず、維持しえないという恩寵絶対の考え方につらなることをうかがわせる。

《...des grâces de Dieu, sans lesquelles il ne se fait point de bonnes œuvres.》(S.C.L-XXV).

こうして、パスカルもまた、《miraculeux effets de Grâce》(S.C.LXXV) について述べたサン・シランにならい、たえず至福の状態を新たにしよう《un effet et une suite de la grâce》に目をとめようとするのである。

《...il faut que la même grâce, qui peut seule en donner la première intelligence, la continue et la rende toujours présente, en la retraçant sans cesse dans le cœur des fidèles pour la faire toujours vivre...》²⁹⁾

《...si Dieu ne l'a engagé par sa grâce. à la conduire, il trauaille en vain...》(S.C.II)

そして、この恩寵の働きが一たん中断されるならば、そこにはおそるべき霊的飢渴状態が出現する。

《...puisque, s'il en interrompt tant soit peu le cours, la sécheresse survient nécessairement...》³⁰⁾

《...comme les jardin qui sont en vn lieu sec, & où il ne pleut que rarement, demeurent tousiours secs et arides...》(S.C.LXXV)

そこで、パスカルはつねに内を清めることを説き、この「新しいぶどう酒」を受けるためにたえず新しくされてあること (renouvellement assidu) の必要を主張する。サン・シランの手紙に

も、《renouvellement de *votre* cœur》をすすめ (LII), 《des Grâces nouvelles》の必要を述べている箇所 (LIII, LXXなど) が、実に多いことは容易に発見しうる。

《Elle se doit disposer à faire un renouvellement général de toute la vie》(S.C. I)

《…nul juste ne saurait faire sans la grâce continuelle de Dieu》³¹⁾

パスカルも言うように、「この恩寵はただ、祈りによってのみ特に与えられる」のであり (S.C. XI), また、恩寵の内なる働きをもたらすものは「聖霊」にほかならないと言えよう。

《…sans l'esprit qui les doit vivifier.》³²⁾

《Dieu leur donne cette grâce actuelle, c'est-à-dire un mouvement et une affection formée dans le cœur par le Saint-Esprit, qui n'est autre que cette grâce…》³³⁾

さらに、パスカルは、神が外的な手段を用いて内なるものを理解させようとなさる場合もあることを語り、そのための準備として十分な「心の配置」をととのえるべきことを論じ、しかるべき心のそなえとともに聴くとき、どんな無知な者でも神の言に感動を受けると述べている。このことは、外にあらわれた信仰の修行よりも、よき心のそなえこそ何より大切であるとする後年の主張 (《*Septième Lettre à Mlle de Roannez*》) にも通じて行くものであろう。

《…apportent plus de fruit à celui qui s'y applique avec plus de disposition… …》³⁴⁾

《…se tenant dans l'éloignement du monde, qui est une des principales condition de cette vie on a la vraie disposition… c'est aussi en cette sorte de préparation que consiste le principal de la vertu de l'Euangile…》(S.C.L)

恩寵をむかえ入れる内なるそなえをととのえること、いわば「源泉を清めること」(《*purifier la source*》 モーリヤック) がパスカルにおける倫理の究極であったとしたら、そういった内的純潔の要求を極度にきびしく主張したサン・シランの教えに、かれがどれ程にか深い決定的影響を蒙ってきたかは、もはや自明の理であると言えよう。

(4)

これら3通の手紙を一統して、だれしもの感じる最初の印象は、サン・シランを頂点の指導者とする当時のポール・ロワイヤルの霊的雰囲気の中に、パスカルがほとんど完全にひたされているという感じであろう。しかも、いくつかの特長あるジャンセニズムの教理を、単に生硬なドグマとして継承しているのではなく、これらの文章を内側から生かしている新改宗者の情熱、また、他者を説得し導こうとするアポロジスト的姿勢の芽生えに注目しておきたい。サン・シランは、コニェ師によれば、思想史的にはジャンセニウスよりも、むしろベリユルのアウグスチヌス主義を受けついでいると言われる³⁵⁾。そして、ベリユルが何より努めたことは、人々を創造主なる神への「謙虚な依拠」(*dépendance humble*)へと連れ戻ってくることであり、すぐれて《*pratique*》な性格をもっており、*piété*の面に特に働きかけることであったという。それゆ

え、マルグリット・ペリエもまた、この時期に自分の叔父が、《des *sentiments* d'une vraie et solide *piété*》の影響を受けたという表現をしているのである³⁶⁾。それは、厳粛なジャンセニスム教理の客観的な認識であったというよりも、*sainteté* への道に具体的に自覚をもって一步をふみ出したということであろう。「最初の回心」とともに、パスカルはサン・シラン的な霊的修業の道のきびしさを、ある「おののき」^{プレミツスメン}とともに、おぼろげ乍ら学びとったと言えよう。なぜなら、次のような言葉を残している人の強烈な人格的感化は、たとえ間接的にせよ、書物と環境を通じてにせよ、必ずやなんらかの深い刻印を心にもたらさずにはおかぬはずだからである。

《Dieu a voulu que j'enseignasse la pénitence aux autres plutôt par mon exemple et par mes souffrances que par mes discours...》³⁷⁾

後年、《*Pensées*》その他において展開されるパスカルの哲学的な世界観の原型のいくつかが、早くも1648年代の手紙のうちに明瞭にあらわれていることに注意しよう。ここにかかわれる思想内容の霊的特質は、一そう深められこそすれ、決して質的な変化をみせることはなかった。その一例として、たとえば第1の手紙に引用された「盲人の手引き」の比喩は、第11プロヴァンシアルにおいては、ジェジュイットを烈しく糾弾する言葉として用いられ、*corps—esprit* の対立とその関係をめぐる考察は、この世界に残された神の像、真理のイメージに関する思想となつて、《*Pensées*》の中にいくつかの見事な断章を生んでいる。恩寵をひたすらに願いもとめる姿勢は、やがて《*Ecrits sur la Grâce*》（特に、*Disciples de saint Augustin*）の個所）中の恩寵論にまで発展して行く。

わたしたちは、この小論において、回心直後のパスカルの信仰的ありかたが、ほとんど晩年に至るまでのかれの全部の霊性の特長をそのままに萌芽としてあらわしていること、そして、それがサン・シランの生きた精神的潮流の中にまったくひたされたものであったことを見てきた。重ねていえば、それは決してある特異な教義の伝承ではなく、一つの敬虔の型、一人の現実の人間によって生きられた一つの具体的な信仰の実存のすがたに追隨したものであったと言えよう。そして、ジャカル氏の述べたように、この人々は、「内なる純粹の教会」を建設しようとのほかのねがいは持たなかったのであり、その教会をただ「内的な、霊的な聖性」によってのみ堅固にしようと努めたのである³⁸⁾。このあと、わたしたちはパスカルが父の死を経て、霊的な危機の段階を通り、「決定的回心」に達して行く過程を、やはりその著作と生涯の諸事件によって、確かめつつ、サン・シランとの関連において見きわめて行くとともに、他面、当のサン・シランその人の歩んだ事跡と思想の形成とを源泉に立ち帰ってたずね、人々をゆさぶってきたその感動の性質を多方面から明らかにして、パスカルへと通じて行く精神的な出来事の重大な意味をできるかぎりさぐってみたいと思う。

- 1) 《…vers le milieu de l'année》 (J. Mesnard: *Pascal, l'homme et l'œuvre*, Boivin, 1951, p.36). Sainte-Beuveは、この年の「秋頃」としており (Port-Royal, t.1, p.896), Brunschvicg は、《derniers mois de 1647》と注記している。 (*Pensées et Opuscules*, p.84).
- 2) *La Vie de Pascal* par Mme Périer, in *Œuvres Complètes de Blaise Pascal*, Desclée de Brouwer, 1964 (拙訳による, パスカール『ラフュマ版によるパンセ』, 新教出版社, 昭和41年, p.19).
- 3) Saint-Cyran: *Lettres chrétiennes et spirituelles*, éd. de 1679, p.115.
- 4) *cit.* in F. Jaccard: *Saint-Cyran, précurseur de Pascal*, éd. la Concorde, 1945, p.115.
- 5) cf. Gilberte Périer: *La Vie de Jacqueline Pascal*, in *Œuvres Complètes de Blaise Pascal*, Desclée de Brouwer, 1964, p.664.
- 6) J. Mesnard, *ibid.*, p.44.
- 7) Bibiothèque Nationale, manuscrit No 17802. f.2.
- 8) Pascal; *Œuvres complètes*, éd. J. Chevalier, Bibliothèque de la Pléiade, 1954, p.482.
- 9) J. Bourbon-Busset, in *Pascal et Port-Royal*, Arthème Fayard, 1962, p.14.
- 10) *op. cit.*, p.482.
- 11) F. Jaccard, *ibid.*, p. 32—33.
- 12) Lettre à M. Le Pailleur, in *op. cit.*, éd. Chevalier, p.384.
- 13) 《*Sur la Conversion du Pécheur*》, (拙訳による, 「病と死についての冥想」, 新教出版社, 昭和34年, p.38).
- 14) C. Gazier: *Histoire du Monastère de Port-Royal*, Perrin, 1929, p.98.
- 15) J. Lhermet: *Pascal et la Bible*, Vrin, 1931, p.120. cf. Saint-Cyran; *Lettres…*, éd. de 1645, t.1, p.137, 138. 244.
- 16) *op. cit.*, éd. Chevalier, p.481.
- 17) Saint-Cyran: *Lettres…*の手紙の番号を示す, 以下すべてS.C.と略記。
- 18) *op. cit.*, éd. Chevalier, p.481.
- 19) note de Brunschvicg, *op. cit.*, p.85.
- 20) 拙稿: 『パスカルとサン・シラン』(1)大阪外国語大学学報第16号, 昭和40年。
- 21) *op. cit.*, éd. Chevalier, p.484.
- 22) *ibid.*
- 23) 拙稿: 『暗さについて』, 「フランス十七世紀文学」第3号所収, フランス十七世紀文学研究会, 昭和43年。
- 24) J. Lhermet; *op. cit.*, p.121.
- 25) *op. cit.*, éd. Chevalier, p.487.
- 26) J. Orcibal: *Saint-Cyran et le Jansénisme*, éd. du Seuil, 1961, p.78.
- 27) *op. cit.*, éd. Chevalier, p.487.
- 28) J. Orcibal., *op. cit.*, p.75.
- 29) *op. cit.*, éd. Chevalier, p.488.
- 30) *ibid.*
- 31) Saint-Cyran: *Choix de lettres inédites*, éd. Delassault, Paris, 1959, p.40.

- 32) *op. cit.*, éd. Chevalier, p.489.
- 33) Saint-Cyran: *Choix...*, *op. cit.*, p.32.
- 34) *op. cit.*, éd. Chevalier, p.489.
- 35) L. Cognet: *Le Jansénisme*, Que sais-je, P.U. F, 1961, p.21—22.
- 36) M. Périer: *Mémoires sur Pascal et sa Famille*, in *op. cit.* p..1099.
- 37) J. Orcibal, *op. cit.*, p.52.
- 38) F. Jaccard, *op. cit.*, p.182